平成31(2019)年度　学校評価総括表　　伊丹市立伊丹特別支援学校

教育目標	一人ひとりの自立と社会参加をめざし、たくましく生きる力を育てる
重点目標	①新学習指導要領の趣旨をふまえ、カリキュラムマネジメントを進める　②特別支援学校としての取組の充実と地域への発信の強化　③安心で安全な学校づくり　④一歩進んだセンター的機能の充実 ⑤教職員が目標を共有し、学部・学年間や各分掌の連携でチーム力を高め、児童生徒への一貫性のある指導を目指す　⑥ゆとりが感じられる職場づくり

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	一人ひとりの教育的ニーズに応じた弾力的な教育課程の編成 （教育課程）	○個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用し、一人ひとりに応じた指導・支援の充実を図る。	○個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、保護者と合意形成を図る中で、児童生徒の指導・支援に関する情報を保護者と共有する。	○「本人・保護者の願い」や児童生徒の実態、これまでの指導・支援の経過等を踏まえて、指導・支援について保護者に説明したり、話し合ったりして、合意形成を図ることができる。	B	個別の指導計画を保護者に開示し、懇談等で話し合いながら作成できた。また、それに伴い通知表の様式を変更し、スリムな形で行えた。課題として、日常生活技術に関する指導の評価が記入しにくく、長期目標と短期目標と前期後期の評価とで継続的に記入しにくい。保護者アンケートで97%が「一人一人に適した学習を行っている」と評価した。	個別の教育支援計画や個別の指導計画に日常生活の指導の欄、または、自立活動の指導目標を書き込む欄を作る。R2年度には学習指導要領に示された3つの観点を踏まえた個別の指導計画作成と評価について研修を行う。	新学習指導要領実施に伴う評価について、さらに研究を重ねていただきたい。 3つの観点、すなわち「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学びに向かう力、人間性の涵養」を目標や評価に盛り込んでいくためには、教員の力量が必要である。しっかり取り組んでほしい。
	わかる授業の構築 （自立活動） （研究推進）	（自立活動） ○相談を活用し、学部・学校全体で情報を共有して授業にいかす。	○相談内容を明確にするため、相談カテゴリを設け、相談票の書き方や過去の相談内容を参照できるようにする。 ○クラスや学部等において助言内容を確認後、学校全体で回覧して情報を共有する。	○各種相談を活用できる。 ○他児の相談内容を教育活動にいかす。	B	計画通り指導助言を全教職員で回覧・周知した。STやOT相談の内容を授業に反映することができた	来年度の課題相談は、認知にテーマを絞って研修する。	発達に応じたキャリア形成が適切に取り組まれており、評価できる。今後も自立に向けた校内の取り組みや、関係機関との連携を推進いただきたい。 ガイドブック作成は素晴らしい。福祉と連携した取り組みをさらに推進してほしい。
		（研推） ○「わかる・できる集団の授業づくり」をテーマに、全教員が主体的に研究に取り組み、授業作りに努める。	○各学部の研究推進担当が中心になって学部やクラスの実態に応じて、研究の目的と方法を明確にして研究授業や公開授業を実施する。 ○それぞれの教員が研究授業や公開授業を通して、学んだことを活かして授業改善をする。	○研究授業や公開授業の取組を通して、学んだことをそれぞれの授業の授業改善に活かす。		公開授業の実施回数を絞ることにより、取り組みやすくなった。新転任（支援学校初勤務）の職員に対する授業づくり（公開授業）の説明が難しいため工夫が必要である。活動分析表を用いて集団の授業の中で個々がねらう課題を明確にすることによって授業の流れや支援方法を共有することができ、授業改善につながった。	ブレインストーミングの手法で授業改善のための新たなアイデアを出したり、授業の構造化を考えることで教室環境についても考えることができた。引き続きこれらを推進していく。また、児童生徒個々の目標を明確にするために、毎年度3学期に、学習到達度チェックリスト、SM社会生活技能などを利用して実態把握を行う。	できるか、できないかではなく、他の人が仕事をしている様子を見るということも体験になるのではないか。 保育園の子どもたちを喜ばせるなど、ボランティアする場として関わることもできる。 自分たちで栽培した花を届ける、制作したものをプレゼントするなど、「感謝される経験をする」ということを、地域に広げていってはどうか。 兵庫県が進めているトライアングル事業に対して、伊丹特別支援学校からも積極的にコミットしていくことが必要である。 今課題になっている事業所との引き継ぎについて、口頭で伝えるだけではなく、何か工夫をする必要があるのでは。保護者の意見を十分聞く必要がある。また、学校、保護者、事業所の3者の会を持つ必要があるのではないか。
	卒業後の進路や生活を見据え自立して社会に参加する力の育成 （キャリア教育） （進路）	（キャリア教育） ○児童生徒の発達段階や発達課題を踏まえたキャリア教育の推進・充実を図る。	○キャリア教育全体計画を踏まえて、キャリア教育の視点から教育活動を展開する。	○キャリア教育全体計画の「キャリア教育で児童生徒に身に付けさせたい力」を踏まえて、指導目標を設定し、指導することができる。	B	中学部では、キャリアプランマトリックスを基に社会参加を念頭に授業を工夫することができた。また、生活単元（職業・国語）の授業や道徳、音楽などの教科の中でキャリア教育を意識した指導を十分に展開できたクラスもあったが、個別の指導計画を立てたり検討したりするときに活用できなかったというクラスもあった。	個別の移行支援計画作成などとも関連付けて、引き続きキャリア教育を推進していく。	
		（進路）○児童生徒個々の適正、希望、課題等を把握し、実態に応じた進路指導・支援を行うための情報について理解する。	○進路説明会で資料等を配布し、進路・福祉に関する情報提供を行う。 ○福祉合同説明会や事業所見学会等を実施し、実際の福祉現場の様子を知る機会を設ける。	○児童生徒の進路指導・支援に関係する福祉制度やサービス等について理解し、問われたら答えることができる。		福祉制度やサービス、市内の事業所等について、見学や福祉合同説明会に向けた資料の作成・準備等を通して、教員の理解が進んだ。進路指導について、何を誰がどのタイミングで伝えることがよいのか、というスケジューリングがわかりにくかた。玄関横の資料コーナー、PTA室前の掲示もとても啓発に良かった。進路担当を中心に進路、福祉の情報を整備したため、クラス担任ではすぐに答えられない質問があっても、フォロー体制が整ってきた。	今年度初めて学校で福祉合同説明会を実施し、これをきっかけに事業所を利用する保護者もあり、進路を考える機会となった。保護者アンケートでもすべての保護者が良かったと回答した。進路担当者が動きやすいように学校体制を整える必要がある。来年度は、保護者とともに事業所見学会なども実施したい。また、卒業生のアフターフォローを全職員で取り組んでいきたい。	
豊かな心・健やかな体	豊かな人間関係の形成 （各学部） （いじめ：総務）	（小学部） ○日々の授業を通して児童の人間関係づくりの基礎を学ばせる。	○学部全体やクラスを超えた学習集団等を適切に編成する。	○それぞれの集団学習の中で、児童が他者と関わる力をつけられるような内容や場面を設定する。	B	集団の授業で児童同士が関わり合う場面や内容を設定することによって、それぞれ他児童への興味や関心、関わりが見られた。	引き続き授業の留意点では個々の児童の他者との関わりについて目標を設定する。	他者との関わりや積極的な交流学習により、個々のコミュニケーション能力が向上していることがうかがえる。主体的な態度等の自己表現だけではなく思いやり等の優しい心を育んでほしい。 障害のある児童生徒とそうでない生徒がともに学びあう機会や時間を持ってほしい。互いを知り、思いやる関係が無い社会は脆弱な社会である。特別支援学校が孤立するのでは無く、地域との交流を活発にしてほしい。 現在の社会に合わせて「いじめガイドライン」の見直しをする必要があるのではないか。
		（中学部）○人とのふれ合いを通し、コミュニケーションの力や相手を思いやる心を育てる。	○校区交流や社会体験学習、日々の授業や学校行事の中で、多くの人と関わり合いを広げる。	○学校の内外の多くの人と関わる機会を設け、生徒自身がコミュニケーション力を発揮し、相手とつながる体験をする。		VOCAやパソコン、iPadなどのICT機器を積極的に活用し、生徒の体の動きに合わせたセッティングをすることで発信力を高められた。	今後も支援機器や自助具の工夫を行い、また、活動分析表を用いて教員の支援と生徒の学びを両立させる。	
		（高等部） ○社会や仲間との交流を通して、コミュニケーションの力を伸ばし、生活の幅を広げる。	○日々の学習や校外学習、交流及び共同学習などの場面で、人と関わる機会を持つ。	○日々の学習や校外学習、交流及び共同学習などの場面で人と関わり、自分の気持ちや考えを発信する機会を持つ。		伊丹市立高との共同学習や県立こやの里、宝塚市立養護学校高等部との交流、高校生とのふれあい交流会など機会を持ち、楽しく参加できた。	来年度尾引き続き計画的に他者との交流の機会を設定し、コミュニケーション録の育成を図る。	
		○互いを思いやる心を育て、いじめのない学校づくりに努める。	○自分の気持ちや考えを伝えたり、他者の気持ちや考えをきいたりして、互いを認めあう関係をつくる。	○学校生活全体をとおして、児童生徒が気持ちや考えを発信できる機会をつくる。		道徳の授業などで相手の気持ち、自分の気持ちを伝え合う学習をしている。道徳の授業を通して相手を思いやる気持ちを育むように学習している。	特に学級会や学活、道徳などで、1時間に1度は発信させるなど、機会を多くするような授業づくりを行う。	
	安心・安全な学校生活の推進 （校内保健） （危機管理）	（校内保健） ○児童生徒の実態に応じて、健康の保持・増進をはかると共に命を大切にする心を育てる。	○個々の状況に応じた配慮及び行事に係る健康管理を行う ○児童生徒の健康に関する情報の共有方法を検討し、全職員で共通理解を図る。	○校内における児童生徒の健康に関する情報共有、学校と医療の連携を図ることができたか。	B	医療的ケアのルールが明確に定まっていない部分がある。職員の医療的ケアに関する情報・知識に差があるるため、医ケア委員会に参加しない職員も現状を知る必要がある。	来年度は県において、医療的ケアマニュアルを試行していく。本校でも県のマニュアルを参考にしながら体制を整える必要がある。	児童生徒の安全を第一に教員の危機管理能力の向上を進めてほしい。 ICT機器を活用して、防犯や、事故が起こったときの見直すことに園内外のカメラを活用している。保護者にも子どもの普段の様子を見てもらえている。個人情報の扱いには注意が必要である。 医療的ケアについて、県ではマニュアルを作成し、来年度より試行する。伊丹市でも医療的ケア運営協議会の設置を行う必要がある。
		（危機管理）○危機管理マニュアルを作成し、生命や心身等に危害をもたらす事象を最小限に食い止めるための訓練等を企画・実施す	○様々な災害に対する防災教育を実施する。 ○集団での訓練を通して生命の安全について考える。 ○非常事態発生時の安全を確保する。	○様々な防災教育を通して自他の生命や心身の安全について考え、行動することができる。 ○非常事態発生時の行動を理解し、活動することができる。		毎年、避難訓練の設定を工夫し、場面設定を変化させ、振り返ることにより意識を高めている。また、ヒヤリハットがあった場合は報告し、安全に対する意識を高めることができた。	計画的な訓練等の実施をし、また、日頃から安全の意識を保てるように、ヒヤリハット報告の取り組みを進めていく。	
開かれ信頼される学校園	学校情報の積極的な発信 （各学部） （ICT活用）	（小学部） ○積極的に授業の取り組みや児童の様子を家庭に伝える。	○毎日連絡帳でそれぞれの児童の様子を伝える。 ○毎月学部通信を発行し、学部の児童の様子を伝える。	○毎日連絡帳に授業や児童の様子を記入する。 ○月1回、学部全体の児童の様子を載せた学部通信を発行する。	B	学部だより、連絡帳を通して、児童生徒の様子を細やかに伝えることで、保護者に理解と協力を得ることができた。学校評価保護者アンケートにおいて、学校は学部だよりや連絡帳を通して子どもたちの様子を伝えているという項目に回答した保護者全員が「よくあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答得ることができた。	各学部とも、引き続き情報発信を積極的に行い、開かれた学校作りに努める。	学部だより等、責校をアピールする広報活動を、保護者だけでなく、地域等にも広げていければと考える。 普段の子どもの様子を保護者へ、職員立ち会いの下カメラ映像を見てもらっている。家庭での姿と園での姿は違うので家庭との共通理解に活用できる。 たくさんの人にホームページを見てもらうためにはアイデアが必要である。ホームページは重要であるので、定期的に点検して、不備の無いようにする必要がある。
		（中学部） ○積極的に学校からの情報を発信し、家庭に開かれた学校を目指	積極的に学校からの情報を発信し家庭に開かれた学校を目指す。	○掲示板では、中学部全体の教育活動について発信する。連絡帳や学部通信では、各生徒の学習について、より具体的な内容の伝達をする。				
		（高等部） ○積極的に授業の取り組みや生徒の様子を家庭に伝える。	○毎日連絡帳でそれぞれの生徒の様子を伝える。 ○毎月学部通信を発行し、学部の生徒の様子を伝える。	○毎日連絡帳に授業や生徒の様子を記入する。 ○月1回、学部の生徒の様子を載せた学部通信を発行する。				
		（ICT） ○保護者や関係機関に信頼されるよう、学校の情報発信の質を高める。	○定期的なホームページの更新を行い、学校や児童生徒の様子を伝えられるような情報を発信する。	○ホームページを確認して、学校や児童生徒の様子が伝えられる情報の提供について考え、共有する。 ○各分掌においても、ホームページを通した情報発信の工夫をする。		「学期末にホームページを見やすく組み替え、進路だよりを掲載したり、保健関係の書類をホームページからダウンロードできるようにするなど、活用できるような工夫を行った。発信はしているが、保護者と意図的にホームページの話はできておらず、十分活用できたとは言いがたい。	各学部、「○週間に1回は更新」という目途を設定し、取り組みをする。	
	一歩進んだセンター的機能の充実 （センター）	（センター） ○校内委員会の運営及び、人材の育成につとめる。 ○特別支援教育における地域のセンター的機能の充実を図り、教育相談、巡回相談、学校園等コンサルテーションなど、各事業を円滑に実施する。	○要請のあった授業への支援や自主研修会等を行う。 ○要請のあった学校園の支援体制に応じて段階的に学校園コンサルテーションを実施する。 ○特別支援教育実践講座の実施（7講座）運営。 ○伊丹市の巡回相談員として要請に応じて巡回相談を実施する。	○要請のあった授業への支援や自主研修会等を行ったか。 ○要請のあった学校園の支援体制に応じて段階的に学校園コンサルテーションを実施したか。 ○特別支援教育実践講座の実施（7講座）運営。	B	・要請のあった学校園・授業への支援を順次適切に行っている ・実践講座では市内のニーズを鑑みながら講座を設定し開催することができた。	校内の授業とリンクしながら、校内外の支援を進めていく。	学校園のニーズに応じた、高い専門性による指導支援に引き続き取り組んでほしい。 限られた人員でセンター的役割を果たすためにはアイデアが勝負である。市内の組織を動かすという視点を持っていくと良いのではないか。

学校関係者委員会総括
新様式による個別の指導計画作成や通知表の改訂など計画通り実施できた。様々な事業所と連携して本校独自の進路ガイドブックを作成したり、「福祉合同説明会」を開催したりするなど新たな取り組みができた。

次年度に向けた重点的な改善点
現在取り組んでいることについて、その位置づけや意義などを一つ一つ確認しながら捉え直していき、学校教育目標の実現に向けてさらなる発展を目指す。

自己評価の基準　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った